

19 新卒歯科衛生士の就業状況の実態および意識調査

○渡辺 美幸, 平澤 明美, 本間 和代, 江川 広子

(歯科衛生士学科)

【はじめに】

わが国では平成18年9月の完全失業率が4.2%、24歳以下に至っては8.5%にも上るといわれている。それに対し、平成18年3月の本学新卒歯科衛生士の求人倍率は3.4倍であり、学生が就職先を選択できる状況にあった。それにも関わらず、卒業後すぐに職場を変わる歯科衛生士が増えている。昨今、学生の気質や技能レベルが変化し、職場でのトラブルも多様化していることから、新卒歯科衛生士の就業状況と意識の実態を把握するため、就職先との懇談会ならびに新卒歯科衛生士を対象にアンケートを実施した。それより明らかとなった問題点を踏まえ、歯科衛生士教育のあり方を検討し、就職指導に役立てることを目的とした。

【対象および方法】

歯科衛生士学科第8回生（平成18年3月卒業）102名を対象に就業状況等（10項目）について平成18年6月郵送法によりアンケートを実施した。回収率は76.5%（78名）であった。

【結果および考察】

現在の就職先に対する満足度は、満足しているが41%、どちらともいえないが42%、満足していないが17%であった。雇用条件よりもスタッフとの人間関係が満足度に大きく影響していることがわかり、コミュニケーション能力を向上させることが必要と考えられる。また、主な業務内容は、歯科診療補助が96%、次に歯科保健指導が84%、歯周病予防処置が79%、う蝕予防処置が64%とあまり片寄りがなかったことがわかった。学生時代の教育への要望は、暫間被覆冠作成や印象採得、SRP、保険請求などがあげられ、反復練習の必要性が伺え、3年制教育において充実させる必要があると思われる。今後の勤務の意思は、68%の者が継続すると回答したが、12%の者は退職を考え、悩んでいることから、自らの問題解決能力を養う必要があり、今後は社会性や豊かな人間性をもち、即戦力となる歯科衛生士を育てることが重要であると考えられる。